

## (Ⅱ-46)「霊渠伝説故事」に見られる河川工事について

千葉工業大学 工学部 正 員 武藤 速夫

はじめに

秦の始皇帝によって開削された広西省壮族自治区にある運河(B.C. 219~214)は、通称「霊渠」と呼ばれ、長江水系(中原)と漓江水系(南越)を結ぶ世界最古の越嶺運河であり、今に至るも往時の形態を良く止めている。筆者はさきに霊渠についての文献的研究成果を発表し、霊渠の概要を紹介した際<sup>1)</sup>、多くの文献の中で、1987年に現地の広西人民出版社で刊行された「霊渠伝説故事」を挙げた。これは霊渠にまつわる主として壮族(チワン族)の民話・伝説集であって、民俗色豊かな興味深い話が28話載せられているが<sup>2) 3)</sup>、その中から特に河川工事に関する話を取り上げて、霊渠の計画や施工上の特徴を紹介することにする。

第一話:「鐮嘴と天平」-南渠・北渠の分水ダム建設-<sup>2) 4)</sup>

霊渠分水ダムの堤頭は先端部が鋤の刃の形をしており、人々はこれを鐮嘴と呼んでいる。其の後方には流水を遮ると共に洪水を排出するダム(越流型堰上げダム)があって、大天平・小天平と呼ばれる。これらが一体となって海洋河(長江の支流湘江の最上流部)の水を三割・七割の率に分け、三割は南渠を経て漓江に流入させ、七割は北渠を経て湘江に流入させる。このような精巧極まる方式を用いた工作物を、どうやって作りあげたのだろうか?・・〈以上書き出し、以下概要〉・・霊渠建設の責任者である史禄と主任技術者の顧青は分水ダムの設計ができなくて日夜悩んだ末、気晴らしに散歩に出る。季節は春の田植えで、百姓達が水路の中程に『人』の字形の小さな石堤を築き上げ、二本の水路に分水しているのに気が付く。更に、牛に鋤を付けて田を耕す際、鋤の刃先が土を掘り起こしながら進むにつれて、土の塊が両側にきちんとひっくり返っていくのに注目し、分水ダムの上流端に鋤の刃形の構造物(鐮嘴)を取りつけたら良いことを思い付いたのであった。〈史禄は多くの文献に頻出しているが、顧青の名が明記されているのは珍しい。〉

第二話:「飛来石」-南渠の開削-<sup>3)</sup>

霊渠の周辺には大きな黒石は見当たらないのに、南渠の堤(秦堤)の上に高さ7m余り、長さ11m余りの巨大な石がある。この巨石は四川省の峨嵋山から飛んで来たという・・・・・。

その昔、史禄が始皇帝の命を受け、大勢の徴用人夫を駆り集め、興安県の湘江上流部で霊渠を開削した時の話。人夫達が三百三十三日も働きつめてダムや運河が完成し、通水したところ、地元に住んでいた猪龍の精が水の音に惰眠の夢を破られ、怒りの余り、風を巻き起こし、鼻先で水路の堤を突き崩してしまった。現場責任者は施工の不備を問責され死刑に処せられた。そこで宮々やりなおして通水したら、またもや猪龍の精に壊されて、次の責任者も死罪となった。また次の責任者が指名されて、苦心惨憺の末に竣工したが、またまた猪龍の精に壊されて殺されるはめになるかと、嘆き悲しんでいた。その時たまたま峨嵋山の「白鶴大仙」が上空を飛んでい

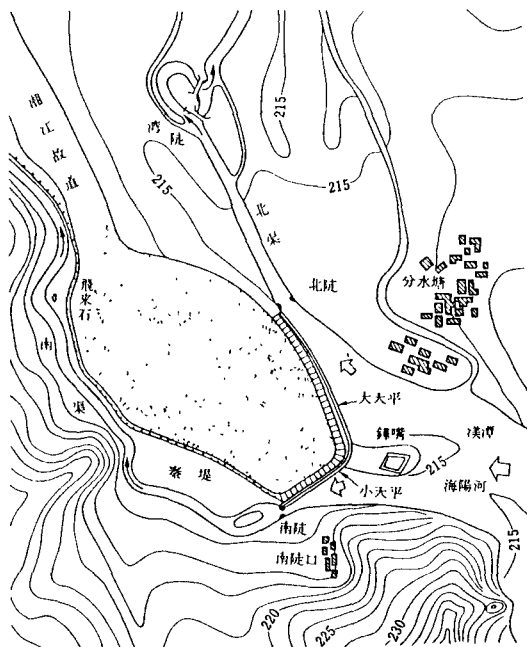


図-分水ダム付近平面図

たが、嘆き声を聞き及び、下界に下りて来た。一部始終を聞くと、線香を一本わたし、しかしかと耳打ちした後に立ち去った。通水した当日、例の如く風が吹き始めたので、貰った線香に火をつけ西北の方に打ち振った所、峨嵋山の方角から上空をひゅうひゅうと巨石が飛んで来るや、猪龍の精の真上にドカンと落下して身動きできなくしてしまい、お蔭で靈渠が竣工した。この「飛石鎮妖」の巨石は今なお現地に云々。

この岩は元来「興安靈渠」<sup>3)</sup>にも指摘してあるように、運河開削工事の際の残留岩である。また岩に彫られた「靈渠」と言う文字の由来についても「査礼拝師」<sup>3)</sup>なる小話があるが、ここには省略する。

### 第三話：「烏龜石」－秦堤の築堤－<sup>3)</sup>

南海龍王は靈渠開削の着工を知り、長江の水を飲めると、その竣工を待ちわびていた。難工事のため工期が遅れているのを伝え聞かぬや、部下の烏龜元帥を応援に派遣した。出立に際し、運河の築堤が難工事であるが、困った時にはこれを飲めと金丹を一粒与えた。烏龜元帥は現地に赴くと、たくましい若者に変身して、十数人でも持てない大きな石を基礎の捨て石に投げ込み、堤を築き上げるが、一夜にして激流に流されてしまう始末。そこで、貰って来た金丹を一飲みしたところ、見上げる巨人になったばかりか、熱が出て喉が渇いてどうにもならず、堤防の決壊箇所に腹ばいになって川の水を夢中で飲んだ……。飲む程に体はふくれ、人々は気味悪がって逃げ帰り、翌朝来て見れば、一匹の大きな亀の形をした石が堤防の基礎となるように鎮座していた。人々はこの烏龜石を基礎にして堤防を完成させ、靈渠全体の竣工を迎えたのであった。

南海龍王は、一命を捧げた烏龜元帥の功績をたたえ、彼の子孫に「長生不老」を贈った。だから今でも亀の寿命は動物の中で一番長いのである云々。（この話の中には、竹蛇竈工法も出てくる）

### 第四話：「仙人掌」－海陽河拡幅工事－<sup>4)</sup>

靈渠の分水ダムの上流を分水塘と称し、ここに流れ込む川を海陽河（湘江の上流）という。この分水塘から遡ること1.5km、海陽河のほとりに岸壁があり、そこに長さ1.2m、幅0.6m程の手のひらの跡があって、指の関節や指紋までがくっきりしているが、人々はこれを『仙人掌』（仙人の手のひら）と呼んでいる。

靈渠の開削以前には、海陽河はこの岸壁の所でぐっと絞られ、流水の疎通障害となっていたから、拡幅工事が靈渠のために必要であった。監督官は大勢の人夫を徴用し、工期を百日と定めたが、岩山が鉄のように固く、工期切れで人夫はみんな殺されてしまった。次の人夫達が徴用されて来たのだが、やはり工事は遅々として進まず、たちまち九十九日が過ぎて、明日は殺されてしまうんだと、支給のお粥も食べる気がせず、ただすすり泣くばかり……。そこに詩を吟じながら仙人がやって来て、何故泣くのか、ことの顛末を聞くと仙人は「心配するな、腹一杯食べて寝てしまえ」と勧める。そうして休んでいる所に冷酷無残の監督官がやって来て仙人との間に一悶着あるのだが、監督官が痛い目にあって逃げて行く（このいきさつは省略）。その夜中のこと、人夫が寝ていると、雷鳴が轟き稲光が閃き、続いて天地ともに砕けるようなドカンドカンという音が響き渡ったが、間もなく音は止み嵐はおさまった。翌朝起き出した人夫達は、一夜にして川幅が計画以上に広がっているのに肝をつぶし、岸壁の上に、くっきりとした掌の跡を見つけたのであった。

このほか、史実にはない靈渠開削の工事主任の悲話「三將軍」を始めとして、「牛血化石」「靈渠統対」「萬里橋」「乳洞岩」「馬嘶橋」等、土木工学の観点から興味ある話が多いが紙面の都合で割愛する。

### 参 考 文 献

- 1) 武藤速夫：靈渠についての文献的研究，第19回土木学会関東支部技術研究発表会講演概要集，II-45，pp. 162-163，1991.
- 2) 武藤速夫・許麗：靈渠伝説故事－解説と翻訳，千葉工業大学研究報告・人文編，第28号，1991.
- 3) 武藤速夫・許麗：続・靈渠伝説故事－解説と翻訳，千葉工業大学研究報告・人文編，第29号，1992.
- 4) 武藤速夫：古代中国の運河「靈渠」について，ダム技術，No. 61，pp. 12-13，1991.
- 5) 広西教育学院編：興安靈渠，歴史小叢書，広西人民出版社，pp. 28-30，1974.